

籠と漆の深い仲

前回「かごで水を汲む」は、葉っぱ系の水汲みかごに話が行ってしまいましたが、本来は、防水が肝心なのだから、こだわるべきは塗布されている漆だったかもしれない。かごと漆の歴史ははるか昔にさかのぼる。何の道具もいらないシンプルな編組技術から見ると、漆を使うということは比喩物にならないくらいのハードルの高さだと思っただが、縄文時代にはすでに現在と同じように使用されている。木製品にも土器にも、黒と赤の色彩も鮮やかに残っていて、装飾的要素も大きい。1万3000年前に漆の樹があったという最新報告もされている。

以前八戸市の是川遺跡縄文館で見た赤い器は、細かい竹細工が土台になっていた。かごに漆が塗られたものは、明治期に籃胎漆器と呼ばれるようになり、現在でも久留米市の伝統工芸として生産が続いている。

厳密に言ってすべて「漆」とは言えないが、コレクションの中にもかなり含まれている。かごの表面に塗布されたもの、表裏全体に塗られているが下地の編み目がわかるもの、その上から模様が描かれているもの、見ただけでは中が編組品とわからないものまで様々ある。

縄文時代の赤色顔料は、ベンガラ(酸化第二鉄)と朱(硫化水銀)の二種類だそう。ここにあるものに何が使われているかはわからないが、この黒い箱も、内側はきれいな赤い色である。ただ、蓋の一部が壊れていて、裂傷のように割れている部分がある。

漆は、縄文時代から補修のためにも広く使われていて、接着剤、補填材としての役割がある。縄文人だったら、植物繊維を漆に混ぜて壊れたところをしっかりと補修するのだろう。残念ながら私としては、これ以上破壊が進まないように恐る恐る使うばかりである。



1025



118



421



521



131



122



621